

前回は備中櫓の基礎について説明しました。今回はその基礎構造の上に載っている「柱」について検討してみます。

備中櫓の柱の材質は、残念ながら江戸時代の記録には残っていません。そのため、城郭に一般的に使用されている材料を使用していますが、内部は「御殿」に準じた仕上げとするために、一般的な櫓とは少し異なった材料を使用しています。

まず土台は、先月説明したとおりクリ材を用いており、その他には松や杉などを使用している部分もあります。そして今回お話をする柱はヒノキを使用しています。

ヒノキの柱は6寸角（約18センチメートル四方）が基本で、2階まで伸びる通し柱には7寸角（約21センチメートル四方）のものが使用されています。

ところで、先日一般見学会を開催したときに「備中櫓内部の柱にヒビが入っている」という指摘を多くの人からいただきました。確かに柱にはヒビが確認できます（写真1）。



写真1 柱のヒビ

実はこのヒビはある程度予想されていたものです。その理由を順序立てて説明しますと、まず備中櫓に使用されているヒノキの柱は「芯持ち材」といって、丸太から1本の柱を削り出したものです。この芯持ち材は通常乾燥が進むにつれてどこかにヒビ

が入ります。秋晴れの休日のできごと。干している布団に黒い無数の斑点が！よく見ると2星のてんとう虫。調べるとナミテントウという虫らしいです。家でカメムシが多いとその冬は大雪といわれますが、天道虫だけに今年の冬は晴れが多いかも。(X)

取材で行った産業展では、津山生まれのいろんな製品が紹介されていて、へえ〜と驚きっぱなしでした。でも、こんな私もテレビ津山のライブ番組にちやっかり出演し、産業展のようすをテレビで見ている(郁)さんを驚かせたのでした。(e)

津山城百聞録

57 津山城備中櫓7 柱のヒビのなぞ？

が入るのは避けられないのです。

ちなみに現在では、このような木材には「背割り」といって柱の1つの辺にあらかじめ人工的に切り込みを入れておき、その他の部分にヒビが入らないような処理を行います。

それでは備中櫓の柱も「背割り」を施しておけばいいではないかというご意見もあると思いますが、あえてそのような処理はしていません。



写真2 備中櫓の内部

その理由は、備中櫓の復元整備の目標として、初代藩主森忠政の築造した「慶長期の備中櫓」にできるだけ忠実にということをおこなっているからです。前述の背割りの技術は元和年間（1615から1624）以降に築造された桂離宮（京都市）の書院に使用されたのが初例であると、史跡津山城跡整備委員会の伊原恵司委員から指摘を受けています。つまり背割りの技術は津山城が完成した後の技術であり、元和以前の慶長期に築造された備中櫓には使用されなかったと考えられることから、今回の復元整備工事においても、この技術は採用しませんでした。

ですから備中櫓内部の柱のヒビは決して「施工不良」ではなく、木材の加工技術に至るまで忠実に「慶長期の備中櫓の復元」をめざしているためなのです。

編集後記

今月の納税

固定資産税4期
国民健康保険料5期
介護保険料7期
納期限：12月27日（月）

ひとの動き

（11月1日現在）
人口 90,270人（前月比+8）
男 43,068人（同+14）
女 47,202人（同6）
世帯数 35,196世帯（同+10）

10月中の異動数

出生 78人、死亡 60人
転入 225人、転出 235人

12月

2004

編集・発行 津山市企画部行政広報室
〒708-8501岡山県津山市山北520
☎0868-23-2111(代) 32-2029(直通) ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp
津山市ホームページ <http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>
(PDFファイルで全紙面を掲載しています)

発行日 毎月10日
印刷 株式会社 廣陽本社

